

| | |
|------------------|---|
| Title | 手工業徒弟並に青年農業労働者に関する労働者心理学の一研究 |
| Sub Title | |
| Author | 藤林, 敬三 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1936 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.5 (1936. 5) ,p.705(119)- 724(138) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19360501-0119 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360501-0119 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

手工業徒弟並に青年農業労働者に関する労働者 心理學の一研究

藤 林 敬 三

労働者心理學の研究が社會科學の一新興部分を構成しやうとする傾向を有することは、私が既に拙著「經濟心理學」中に概説した通りである。しかしこの種の研究の重要さは素より、その研究が如何なるものであるかに關しても、不幸にして未だ一般には理解せられてはゐない。(註一)そしてこのことは特に吾國に於いて然りである。即ち従來吾國では労働者心理學の研究は全く皆無であるとは云ひ得ないとしても、それに近い状態であり、社會科學者も亦心理學者も今日尙ほこの種の研究に對しては全く無關心の態度を採つてゐるか如くに見へる。かくの如き状態に對して、私が此處に労働者心理學の一研究と見做さるべきものを紹介することは、必ずしも無益ではなからうと考へる。

註一、私は拙著「經濟心理學」中労働者心理學の研究に於いて、アドルフ・ブーゼマンの「教育學的環境學」(Pädagogische Milieukunde)に就いては全然關説しなかつたのであるが、彼に於いては労働者の兒童並に各種の青少年労働者に関する労働者心理學の研究が、正にその「教育學的環境學」の内に包括せしめられてゐる。そして云ふまでもなくそれは教育學的

手工業徒弟並に青年農業労働者に関する労働者心理學の一研究

研究の一つの新しい方向を示してゐるものではあるが、私の見る所を以つてすれば、それは教育的實踐から労働者心理學の研究を重要視するに至つたものである。しかし教育的實踐が労働者の生活形態乃至生活態度に關する實踐的方策の一面に過ぎないものである以上、所謂教育學的環境學は寧ろ労働者心理學中に解體する方が適當のやうに思はれる。ブーゼンマンの見解に就いては何れまた別の機會にこれを論評したいと思ふ。しかし何れにしても、ブーゼンマンに依つて假令それ類が教育的實踐の立場からに過ぎないとは云へ、労働者心理學の研究が重要視せらるゝに至つてゐることは誠に至當であらう。かくの如き科學的關心の發展は教育學者は素より、心理學者も、亦労働者の生活に關心を有する總ての社會科學者に對して取つても一顧に價ひするであらう。ブーゼンマンの研究に就いては次ぎのものを参考にせられ度い。

A. Busemann; Pädagogische Milieukunde I, 1927.

Denselben, herg. von; Handbuch der Pädagogischen Milieukunde, 1932.

此處に私が紹介しようとするものは、Fritz Pallokat の行へる「東プロイセンの徒弟並に青年農業労働者のその職業並に労働に對する關係」に就いての研究であり、(註二) 彼の研究の對象となるものは一つは修業青年労働者であり、他は無修業青年労働者である。即ち前者は東プロイセンの或る町——人口一九三八人——に於ける各種の手工業者の徒弟であり、後者はその町近邊の村落に於ける青年農業労働者(Hofgänger od. Scharwerker)である。そしてこの研究は右の兩者共に約五十名に關する所謂社會誌的方法に基づく労働者心理學の研究であると云つてよい。しかしパロカートの云ふ所に從へば、最近の青年心理學の研究は主として都市の教養ある青年に關するものであつて、労働者、農民、手工業者の方面に於ける労働青年に關する科學的心理學的研究は殆んど顧られない状態であつて、彼の研究は正にその缺を補はんとするものである。しかし吾々から觀れば彼の研究は手工業徒弟と青年農業労働者に關する労働者心理學上の一つの類型的研究、乃至それに近いものであると云はなければならぬ。尙ほ彼は

右の青年労働者の各年齢段階に於ける謂はゞ發達心理學的研究の重要を認めて居り、しかも充分の研究材料の缺乏の故に此處にこれを暫らく中止してゐる。私は讀者と共に此處にこの方面の研究の完成を期待すること甚だ切なるものであることを附言して置かう。

註一 F. Pallokat; Osterreichische Lehrling und Hofgänger in ihrem Verhältnis zu Beruf und Arbeit, in: Zeitschr. f. Angewandte Psychologie und Charakterkunde, 49. Bd., Heft 1/2, 1935, S. 2-91.

最初にパロカートの採用した方法に就いて讀者の理解を得て置くことが重要である。

彼に從へば人の意識生活はその生活の現實、意識生活の營まれる特殊の状態からのみ理解せられ、恐らく説明せられ得るものである。かくの如き見解が労働者心理學の方法論的立場を直裁に表明するものであることは此處に縷説を必要としない。彼は前述の東プロイセンのある町並にその近邊の人々の自然的並に社會的環境に就いては既に數年來熟知してゐる所であつて、從つてこのことは彼をしてその研究を容易ならしめこゝる許りではなく、また彼の行へる労働者心理學の社會誌的調査をして科學的に信用あらしめる一つの條件でもある。即ち彼はその研究の最初に當つて、彼の研究對象となる労働青年の生活環境を描いて、先づ彼等の生活せる地方の自然的環境、社會的、並に經濟的狀態を吾々に傳へ、且つ労働青年の労働の諸條件を詳にしてゐる。そして彼はその労働青年とまた彼等の労働生活に絶えず近づき、常に彼等の信頼と協働とを得やうと努めながら、あらゆる機會を利用して彼等の行動を觀察し、彼等の意識生活の内部に觸れやうと試みた。また此處に彼は第三者の觀察報告と協力とを得てゐる。即ち手工業徒弟の場合にはその多くの親方の觀察報告が得られ、特に學校教師は彼のために徒弟の人物調査表(Personal-

Mathesonの記入を行つて下れた。青年農業労働者の場合には地主に對する彼の質問は殆んど望ましい結果を齎さなかつたので、彼は特に三人の農園役員の協力に依つて彼の研究を確證しやうと試みてゐる。かくの如く彼の研究に於いては可能なる種々なる方法に於いて研究資料の蒐集が行はれてゐるのであるが、その利用に於いて特に彼の重點を置いてゐる所は次ぎの點である。即ち彼の觀察せる所は労働青年の自己證言に依つて、また反對に徒弟並に青年農業労働者の自己表現は觀察結果に於いて檢證すると云ふ態度である。

以上を以つて大體パロカートの研究が社會誌的方法に基づくものであることが推知せられるであらうが、尙ほ彼の得たる研究材料を示せば次ぎの如くである。

- (1) 五百九十二の刺戟語法に依る作文及びその他の作文
- (2) 職業並に労働に關する問題に就いて、計畫的に行つた徒弟並に青年農業労働者の座談會に於ける十二のプロトコル
- (3) 十八人の親方の觀察報告に關するプロトコル
- (4) 青年農業労働者に關する三人の證人の六ヶの報告
- (5) 四十六の人物調査表(徒弟に就いて學校教師の完成せるもの)
- (6) 研究者の行へる觀察、労働青年の自己表現、その他の諸事實に關する確證
- (7) 労働青年の手紙及び他の特殊の報告(労働青年中日記を誌すものが一人もなく、従つてこの方面の資料は得られなかつた)

元來社會誌的調査が唯だ一人の研究者に依つて行はれる場合には相當の時日を要することは勿論であるが、しか

もパロカートが右に示しただけの研究材料を獲得し得たことに對しては吾々は相當の敬意を拂つていゝ。素より彼の研究が社會誌的調査に基づくものとしては、尙ほ吾々に不充分と思はせる點が無きにしてもあらずではあるが、例へば各労働青年の本來の家庭生活の態様の如きその調査に於いて更に詳細に探究されなければならぬものゝ一つであらう。

二

先づ手工業徒弟の職業並に労働に對する意識的關聯に關するパロカートの研究から紹介しやう。

(I) 徒弟の職業選擇

徒弟は大體自己の職業に入る以前から明確な職業希望を有して居り、また事實その職業習得に際しても彼等は甚だ熱心である。先づ彼等の職業選擇に關して觀るに、明確なる職業上の希望を有するものに於いて、その職業選擇の動機は種々様々である。しかもパロカートはこの種々なる動機體驗の時間的系列を辿つて、彼は二つの基本的出發點に到達してゐる。その一つは外部的印象に基づき、他の一つは漠然と現はれて來る傾性に基づく特殊の體驗である。そしてこの二つの出發點からする體驗系列は次ぎの如きものと考へられてゐる。

(イ) 外部的印象を出發點とする體驗系列

- | | |
|--|---|
| <p>徒弟の自己意識の表現</p> <p>一、吾々の村に一人の指物師が居たが、自分は常に彼の仕事を傍觀してゐた。</p> <p>二、それが私の氣に入つた。</p> <p>三、自分は屢々其處(手工業者の仕事場)へ行つた。「私は</p> | <p>心理的過程</p> <p>1 職業の實際に就いての知覺(人若しくはその狀況)</p> <p>2 感情的反應</p> <p>3 注意の増大</p> |
|--|---|
- 手工業徒弟並に青年農業労働者に關する労働者心理學の一研究

- 三、毎日其處へ行つてゐた。
- 四、それから私は大いに心が動された。
- 五、その職業は安固である。
- 六、家具は常に需要せられてゐる。
- 七、父は私に左官になることを希望して居り、また叔父は指物師になるなど云ふ。
- 八、私は總ての可能なることを考へて見た。
- 九、自分はどうしても指物師にならうと考へた。
- 一〇、父は私の求職の廣告をしなければならなかつた。
- 一一、母は私に職を求めて下れた。

(H) 自己の傾性を出発点とする體驗系列

- 一、私は鋸を使ふこと sawing が常に大變好きであつた。
- 二、それが私には面白かつた。
- 三、家でも學校でも私は鋸細工を澤山した。
- 四、それが私には大變面白かつた。
- 五、父は私に『お前は常に Knivling であつた。お前は指物師になれ』と云つて下れた。私は自分が器用であることに氣付いてゐた。
- 六、私はまた商人にもなりたかつたが、計算が下手である。

心理的過程

- 1 特殊の活動(傾性、傾向)
- 2 活動喜悅
- 3 傾性の意味に於ける活動の強化
- 4 活動喜悅の増大
- 5 他人及び自己の思考、連想、目的
- 6 動機の闘争

- 七、しかし熟練を有するものは別ものである。
- 八、母が自分に職を世話して下れた。

- 7 決意
- 8 年期奉公に入ることに依つて右の決意が實現せられる。

右の體驗系列中に示された個々の意識に關聯して、パロカートの調査結果は次ぎの如くに展開せられてゐる。

被研究者たりし四十七人の徒弟中僅かに五人を除いて他のものは總て明瞭なる職業希望を有して居り、唯その内二人の例外的希望者があつたのである。その一人は水夫となることを、他の一人は工兵たるの希望を有してゐた。そして残りの四十人は總て手工業者たり、商人たらんと希望してゐたものである。これを以つて見れば、明かに彼等の希望せる職業は多くは彼等が直接自身で見、且つ觀察することの出来る機會を持つたものである。そして彼等の希望の範圍は狭小であり、職業上の希望に關する空想、夢想、高遠なる計畫などは事實職業生活に入る直前の青年には全く存しない。またこれを父の職業、並に両親の社會的地位に比較して見るに、彼等の職業希望は概して両親の社會的地位よりも僅かに一段高い、或はそれに稍々對應する職業に關聯してゐる。そして父の職業はその子供たる徒弟の職業希望中には殆んど直接に反映されてはゐない。更らに四十七人中三十四人が元來自己の希望せる職業を選択し得て居り、且つ彼等の職業希望の強度は種々ではあるが十一人のものは甚だ強く、共に多少の障害に打ち勝つてその希望に生きてゐる。

多少の程度に於ける明瞭な職業希望の外に動機としての傾性が考へられ得る。そしてこの傾性が事實職業上の適性と相伴ふ場合には、特にそれは職業選擇に對して決定的な作用を持つ。この職業に對する傾性、或は興味は、パロカートに依つて心理學的には次ぎの如く理解せられる。即ち(一)傾性は純現象學的には傾向として現はれて居り、それに於いては感情質か、或は特殊の意志的要素か、その何れが問題となるかを決定することは困難である。(二)

特殊の活動様式は遊戯から由来するものであり、且つ一部分は遊戯であり、その能力の發展と共に漸次より目的決定的行爲に進展して行くと考へられる。(三)進んで…するとか、氣に入つたとか、興味があるとか、面白いとかといふ表明が職業動機として報告せられてゐるが、それは明かに感情生活の範圍に屬してゐることである。そして感情が全意識生活に於いて最も重要なその統制者であることは、パロカートの對象となつた青年の場合にもよく現はれてゐる。彼は青年のこの體驗をば感情的現象として、彼等の自我の基本的にして、決定的、積極的な態度であると云ふ。

徒弟の職業選擇に對してはまた他の人々の助言が多少の影響を持つてゐることは明かである。その助言者としては両親が最も重要な地位を占め、且つ両親の助言は甚だ手近の、冷靜な、實際的な觀點に支配せられてゐる。両親に次いで同年輩の、或は少しく年長の兄弟、友人、従兄弟が重要な影響を有して居り、更に下つては隣人とまた特に手工業者の助言が重要である。徒弟の職業的關心に對する學校の影響は左程大ではなく、また職業に關する彼等の知識は多くは皮相的である。そして彼等の職業選擇に當つては一般的内容を持つ諸種の可能性、目的、理想及び熟慮と云ふが如き思考の行はれることは甚だ少なく、其處に一般的なのは甚だ手近な、冷靜な、實際的な考慮であり、従つて彼等の職業選擇の思慮は著しく空想と理想とを缺いたものである。

尚ほ以上の諸動機に關して事實報告せられたるものゝ集計とその割合は次ぎの如くである。

- 一、傾性……………七〇・四〇・〇%
- 二、他人の模範と年長者並に同年輩者の助言に依る影響……………六〇・三六・一%
- 三、諸可能性、特殊の目的、目標、理想の如き思考内容……………一九・一一・四%

四、その他諸種の動機(適性缺乏の自覺、偶然その他)……………一七・一〇・五%

合計

一六六・一〇〇・%

(2) 徒弟の労働に對する態度

かくの如き微妙な問題に對しては單に徒弟の報告のみならず、彼等の行動の客觀的觀察、彼等に對して繰返される反問、第三者の觀察報告等を參考にすることが必要である。

先づこの問題に關する研究結果の概要を云へば、四十七人中三十九人はその職業に對して積極的に、僅かに三人のものが消極的に、そして残りの五人がその中間に動搖せる態度を示してゐる。この徒弟の労働に對する態度に影響を持つと考へられるものは、先づ彼等の就職に對して多少の意義を持つ所の前述の、特に職業希望、傾性、他人の模範、助言等である。そして彼等の職業希望を滿たすことは大體、勿論必ずしもその總ての場合ではないが、彼等の労働態度に好影響を齎らす。その然らざる場合は特に徒弟の素質が労働に必要な能力に適應しない場合である。但しこの適性に關して、その反對の場合がそれに反對の態度を條件づけると云ふ確證は存しない。

更らに徒弟の態度に影響する他の諸要因に關しては、パロカートはこれを積極的要因と消極的要因に二分し、その兩者に於いて主たるものは労働そのものに關する要因と親方の人格に關する要因とである。

先づその積極的な要因に就いて見るに、その二百二十五の要因は大體次ぎの五種に總括せられる。即ち

- 一、労働そのもの……………一一二
 - 二、親方……………八二
 - 三、通俗處世觀(例へば、人は働かざるべからず、と云ふが如き見解)……………九
- 手工業徒弟並に青年農業労働者に関する労働者心理学の一研究 一二七 (七一三)

- 四、昇進、向上の努力と希望……………二二八
- 五、職業上の奇異、偶然事……………二二七

合計

二二五

右の内第一の作業そのものに關する積極的要因一二二の中、特に八五は徒弟をして好んで労働に従事せしめる要因であつて、それは次ぎの如く分類集計せられてゐる。

| | |
|----------------------|----|
| 新しい、且つ全般に渡る仕事…………… | 三四 |
| 機械を使用する仕事…………… | 一三 |
| 氣樂な作業速度を以つてする仕事…………… | 七 |
| 戸外の作業…………… | 七 |
| 困難な仕事…………… | 七 |
| 獨立の仕事…………… | 四 |
| 容易な仕事…………… | 四 |
| その他…………… | 九 |

このことから吾々の知らねばならない第一の事柄は、作業そのものは各人各様ではあるが、新規の仕事であつて、部分作業ではなく全般に渡る仕事は徒弟の態度に最も好影響を齎らすものである。即ち新しい材料を使用し、仕事を自己の手に於いて完成することが彼等の最も好む所である。且つまたこの場合に彼等の取り扱ふ材料の物理的性質が同様に重要な關係を持つ。總じてこの場合には心理學的には、徒弟の完成對象に對する表象觀念と、ある事に自ら創造的に従事しつゝあるといふ意識が、彼等の労働態度に好影響を齎らすものであると考へねばならない。

第二に親方の人格に關する積極的要因は次ぎの如きものと考へられる。

| | |
|--------------------------------------|----|
| 親方は直ちに罵つたりはせず、彼は友誼的であり、善良である、等々…………… | 二九 |
| 親方は特別の給與をして下れ、また感謝的である、等…………… | 一八 |
| 親方は嚴格ではあるが、餘りに嚴格過ぎることはなく、公正である…………… | 一六 |
| 親方は何事かを教へ込んで下れ、また自ら勞苦を惜まない…………… | 一一 |
| その他(例へば、親方は多くのことを望まず、また不平を云はない)…………… | 七 |

次に徒弟の労働態度に關する消極的な要因として得られた二百二十のものは次ぎの如く總括せられる。即ち(1)労働そのものに關しては一〇八、(2)親方の人格に關するものが九二、(3)その他(例へば失業の怖れ、親方婦人の態度、劣悪な作業要具等)二〇がこれである。この内第一の一〇八の消極的要因中、徒弟の好まざる仕事とする一〇〇のものは次ぎの如くである。

| |
|--|
| 修繕仕事(二四) 補助的作業(手助け仕事、仕事の準備をすること、掃除、片付けをすること)(二三) 親方の家計上の仕事をさせられること(一七) 不潔な仕事(二三) 非常な力仕事(一〇) 單調な仕事(四) その他(屍體の入棺、便所内の仕事等)(九) |
|--|

また第二に徒弟に對する親方の人格的態度として消極的な要因と見做されるものは、親方の非友誼的な取扱ひ(徒弟を叱りつけたり、打つたりする態度)(五三) 親方が餘り長時間の労働を行はしめること(一五) 親方が小使錢を一文も與へて下れないこと(七) 徒弟が運動クラブに参加したり、外出したり、喫煙することを親方が禁ずること(六) 親方の不公正な態度(三) その他(親方が殆んど何事にも無關心であること、まづい食物を供せられること)

と、休暇が與へられぬこと等) (八)である。

これを要するにパロカートの研究結果から吾々の知り得る所は、徒弟の労働態度に最も重要な影響を有するものは本来の手工業的作業と、自覚せる徒弟に對する親方の人格的態度の如何であると云ふことが出來やう。

(3) 徒弟の將來の計畫

徒弟の職業並に労働に對する態度は、また彼等の意識生活に於いては、彼等自身の職業上の將來の計畫にまで延びてゐると假定することが必要であり、反對にパロカートの信ずる所に依ると、徒弟各人の將來の計畫から彼等の職業に對する意識的關係を考慮することが可能となる。しかし徒弟の將來の希望は種々様々ではあるが、本研究の主題に關聯して概括的に云へば、此處に研究對象となれる小都市の徒弟の大部分のものに於いては甚だ強き職業的關心が示されてゐる。

(4) 親方並に學校教師の徒弟に關する判斷

第三者としての親方の徒弟に關する觀察報告は二つの點に於いて重要視せられる。即ち先づ親方は徒弟の自己意識の表現に對して重要である諸觀察並にその觀察結果を報告することが出來、また人と事物とを全く現實的な意義に於いて觀察することに慣れてゐる親方の實際生活に關する證言は、それ自體價值あり、意義あるものである。かくてパロカートは十八人の親方の觀察報告を得たのであるが、その内一六人は積極的評價を以つて、他の二人は消極的評價を以つて徒弟の仕事に對する意識的關係を判斷した。親方の右の報告は總計三四〇であるが、その内一八四は徒弟に好意ある判斷であつて、他の一五六は徒弟に望みを失へる判斷である。更らにその前者は具體的には次ぎの如くに分たれる。

- (一) 徒弟の労働態度。進んで仕事に従事し、熱心であり、眞面目であり、仕事に興味を有してゐる。等……………五七
- また有能でもある……………三一
- 二、手工業的素質と器用さを有してゐる……………二九
- 三、作業方法。活達であり、輕快である。等……………八
- 良心的であり、信頼し得るし、徹底的である。等……………八
- 獨目的である……………七
- 四、徒弟の親方に對する態度。従順である……………一一
- 謙遜であり、行儀よく、溫良である。等……………一〇
- 五、その他、凡帳面であり、自分獨特であり、正確であり、平靜であり、家庭的であり、野望を有してゐる。等……………二三
- これに對して親方の消極的評價判斷は次ぎの如き内容に分たれる。
- 一、徒弟の労働態度。無關心であり、進んで仕事をせず、興味を有してゐない等……………四一
- 氣が移り易く、不注意である。等……………九
- 口數が多く、愚圖であり、愚鈍であり、怠惰である……………九
- 二、親方に對する態度。従順でなく、横着であり、反抗的であり、敬意を持つてゐない……………二二
- 打解けない、信頼出來ない、親方のためを思はない……………一六
- 不遜であり、神經質である……………五
- 三、徒弟の素質。理解が鈍い、不器用である……………二〇

手工業徒弟並に青年農業労働者に関する労働者心理学の研究

四、作業方法。

粗漏であり、皮相であり、輕卒である……………一一

遲鈍であり、鈍重である……………六
一〇

依頼心が多い……………二

五、その他。

活氣なく、小膽である……………五

名譽心がなく、義務感を欠いてである……………五

無思慮である……………二
一五

正直でなく、偷みをする……………二

几帳面でない……………一

更らに職業學校の教師に依つてなされた判断は主として職業生活の理論的方面に關係して居り、二四五の積極的判断と一三三の消極的判断が得られた。そして三十七人の徒弟がよく判断され、九人が悪く判断せられてゐる。

三

以上徒弟に關する研究に於けると同一の問題に關して、パロカートは青年農業労働者の研究を行つてゐる。以下順次その概要を傳へることゝしやう。

(1) 青年農業労働者の職業選定

青年農業労働者の場合には、徒弟の場合と異なり、彼等には一部分通常の意味に於ける職業體驗が缺けてゐる。従つて此處に研究者の問題とせられた所は次ぎの二つの點である。

(一) 青年農業労働者は職業希望を有してゐたか。

(二) 彼等は如何なる程度まで職業を選択することに依つて彼等の職業希望を實現してゐるか。

此處に被研究者となれる青年農業労働者の總てのものはその希望せる職業に就くことが出來ず、しかもその總てが多少の程度に於いて強制的に農業労働者となつたものである。元來彼等の大部分は一定の職業希望を有してゐた。即ち被研究者三十人中全然職業希望を有しないものは四人に過ぎず、他の二十六人は次ぎの如き希望を抱懷してゐたのである。即ち手工業者(一四人) 酪農者(四人) 警察官及び軍人(三人) 海員(二人) 農夫(一人) 教師(一人) 自動車運轉手(一人)が希望せられてゐた。これを以つて見れば、手工業者の徒弟の場合と同じく、彼等は全體彼等の生活環境中に見且つ觀察する機會を持つことの出來た職業を希望してゐると云つていい。そして彼等はその職業希望を實現することに依つて、彼等に直接的な環境である地主所有の田園から逃れやうと企圖してゐたことは明かである。それは兎も角として彼等の職業希望の範圍は小であり、彼等は單に實現可能な職業のみを希望してゐる。空想的希望も亦大膽な計畫も彼等には存しない。しかも職業希望を有するものゝ内には一人も農業労働者たらんことを元來希望してゐたものはない。

青年農業労働者に就いてその職業選擇の動機を抽出することは不可能である。蓋し彼等に於いては職業の選擇は問題とならなかつたし、また事實行はれなかつたからである。しかし偶々彼等は職業希望を有して居り、従つてその希望の動機だけは知ることが出来る。

研究者の觀察の結果に依れば、青年農業労働者の多くのものに於いてはその職業希望の背後には斷乎たる意欲が存してゐない。彼等はその希望の可能性を信じてゐない。彼等の希望は光なく、不明瞭であり、また微弱でもあつた。加之、彼等の職業希望、彼等の職業理想は誠に原始的であり、環境條件的であり、單純な生活上の欲望の充足と肉體的福祉の念慮に關係せしめられてゐるに過ぎない。彼等の内の何人も一定の職業を得て職業上何事かを爲さ

うとするものではなく、彼等は富まんがために、或は何事かを企てんがために金を得やうとするのではなく、唯だ一日を安慰に過さんがために働かうとするに過ぎない。吾々はかくの如き事實を理解し得んがためには、農業労働者と農業労働青年の生活圏からしなければならぬであらう。

更らに彼等にはその希望せる職業に好んで従事しやうとする動機が甚だ微弱である。しかし勿論この場合には職業希望の意味に於ける職業の選擇の客觀的不可能性を彼等が自覺してゐることが、恐らく心理學的に重要な役割を演じてゐるものである。また總じて彼等には劣等感が明かに現はれてゐることも見逃せない。農業労働者の子弟が一人もその父の職業に就かんとする希望を有するものはないが、しかし何れの場合にもその両親の勸告が報告せられてはゐない。また事實両親はその子供を家庭に置き賃仕事に従事せしめやうと努力してゐる。先きに彼等が多少強制的に農業労働青年として止められてゐると述べた所以である。

(2) 青年農業労働者の労働態度

パロカートはこの問題に於いて五十人のものを對象としたのであるが、その内三十六人は消極的な、八人が積極的な、そして残りの六人がその中間に動搖せる労働態度を採つてゐる。しかも積極的な労働態度を有するものは地主領經營内に何等かの一つの役目を與へられてゐるものであることを考慮することが重要である。

彼等の労働態度に影響を持つ消極的條件の要因は二二〇數へられる。且つそれは次ぎの如く總括せられ得る。

- 一、好ましからざる仕事……………九三
- 二、地主、管理人に関するもの……………五四
- 三、賃銀……………四〇

- 四、住宅……………一五
- 五、社會的生活狀態に関する意見……………一〇
- 六、その他……………八

右の内第一の好ましからざる仕事に就いて報ぜられた七〇のものを具體的に見れば、(イ)秋と冬の畑仕事、例へば施肥(三四) (ロ)冬の打穀仕事、例へば穀運(一八) (ハ)苦しい收穫作業、例へば穀物を束にすること(一一) (ニ)その他、例へば農場掃除、森の中の仕事(七)である。そしてこの好ましからざる労働の理由として擧げられた八〇のものは次ぎの如くである。(イ)労働が苦しい、餘りに過重である(三五) (ロ)仕事がつまらない、仕事が氣に入らぬ、等(二六) (ハ)仕事が大層である(二三) (ニ)その他、例へば仕事に退屈である等(六)がこれである。右の消極的な要因に對して、労働態度に積極的な影響を及ぼす要因として報ぜられてゐるものは、次ぎの如くである。

- 一、好ましき仕事……………七〇
- 二、地主(及び管理人)に関するもの……………一五
- 三、労働、見識に関する考へ……………七
- 四、賃銀……………二
- 五、良き住宅……………二
- 六、その他……………六

合計

一〇二

この積極的要因中の主要なるものとしての好ましき仕事とは、具體的には(イ)家畜の世話(二七) (ロ)天氣のよ

い日の畑仕事、收穫作業(二五)(ハ)屋内仕事(八)(ニ)打穀(六)(ホ)その他(四)である。そしてその理由として報ぜられてゐるものに依ると、(イ)仕事が氣に入る、楽しみである、美しい(三六)(ロ)容易である(二一)(ハ)屋内仕事であり、乾燥してゐる(四)(ニ)唯だ一人で仕事をする(四)(ホ)清潔である(二)(ハ)その他(三)である。

(3)青年農業労働者の將來の計畫

職業生活上の將來の計畫に就いての彼等の考へは一般に不確定である。特に彼等の職業希望とその將來の計畫との間に一致を有するものは極く僅小に過ぎない。しかし彼等の労働とその職業に對する消極的な態度は、その職業更らに一般的には農村から逃れ出やうとする傾向の内に最も強く特徴づけられてゐる。即ち都會移住の欲望は彼等の自己意識の表現の可成り多くのものに明かに現はれてゐる。そしてそれは三十人の被研究者中の半数以上のものは希望であつて、かくの如き希望を有するものは例外なく農業労働青年中最も能動的であり、精神的に最も活氣あるものであり、また最も有能なるものである。

四

以上がパロカートの研究の概要である。彼は更らにこの研究の最後に彼の研究の全般を摘要して十六の命題を擧げてゐるが、私は此處にその少數の命題を摘出して私の紹介の結論に行き度いと思ふ。

パロカートの云ふ所に依れば、

(一)青年の意識生活はその大なる多様性の詳細な叙述に於いて、また彼等の自然的並に社會的生活諸條件に関する精確な洞察に於いてのみ理解せられ得るものである。

(二)青年の意識生活の研究のために從來利用せられたる方法は、往々にして人爲的であり、また不充分のものである。唯だ客觀的な事情に従つて適當なる方法を綜合的に用ひること、殊にその場合の事情に應じて方法を變更することが有用なる結果を保證する。

(三)此處に對象とした手工業徒弟と青年農業労働者とが人間として本質上異なるものであり得ないにしても、その兩者の間には數年ならずして甚だ著しい相違が出現してゐる。

パロカートのこれ等の所言に就いて見るに、その第一の見解は労働者心理學的方法論的的基本の見解に一致し、また第二の點は私の謂ふ労働者心理學の研究方法としての綜合的方法(註三)の有用を説くものであると解釋してゐる。唯だ彼がこの場合に特に被研究者に直接關聯する客觀的諸事情に應じて諸種の方法を變更して用ふる必要であると見做してゐることに就いては吾々も亦これを認めねばならない。確かに労働者心理學の綜合的方法が豫め想定せられた確固不動の個別的諸方法からなると考へることは不適當である。例へば被研究者の日記を研究の一資料とすることは、若しそれが可能なりとすれば、吾々の當然考へねばならない所である。しかしそれが常に可能であり、また有効であるとは限らない。パロカートの場合にこれを見れば、彼は明かにこの方法を採用してはゐない。しかも彼のこの研究態度は次ぎの如き客觀的事情に依つて是認せられる。即ち彼の被研究者中には日記を誌するものが一人もなく、また彼等はかくすることを以つて笑ふべきことと做してゐたのである。

最後にパロカートの右の第三の見解は二種の労働青年に関する彼の研究結果の比較の結論として、吾々に最も興味ある所である。蓋し同一の村立學校を卒業したものが一方では手工業者の徒弟となり、他方では農業労働者として依然農村に止つて居り、しかも數年ならずしてこの兩者の間に著しい相違が生じてゐるとすれば、それは兩者の

現在の生活環境からの本質的影響の結果として、兩者の個性の進展の類型的相違を示すものであると考へられようであるからである。今假りに果して然りとすれば、吾々はこの兩者の類型的相違を兩者の現在の生活環境の相違から理解しなければならぬし、また理解せられ得る筈である。また若しこの兩者の間の相違が此處に假定せられたやうな類型的な相違を示してゐるものでないとするれば、吾々はその相違の説明を更らに彼等の過去の生活環境の内々に求めやうと努めなければならぬ。そしてこれが吾々に課せられた當然の科學的態度である。

しかもかくの如き研究態度から見ると、以上のパロカートの研究は、その正しい方法論的立場にも拘らず、この最も重要な一點に於いて未完成であり、或はまた甚だ不充分であると云はなければならぬ。總じて彼の研究に於いてはその被研究者の自然的並に社會的生活諸條件に関する洞察が行はれてはゐるが、私の讀了後の印象に従へば、その多くは未だ彼の研究の核心に連結せしめられてゐないと云つてよい。従つてこの稍々不徹底な問題の取り扱ひ方が纏て、右の私の批評の如く、彼をして徒弟と青年農業労働者との間の著しい相違を充分基礎づけ得るやうな研究に立入ることを妨げてゐると見做して宜しからう。

註三、拙著「經濟心理学」後篇 第三章 参照。

—昭和十一年三月二十二日稿—

自然法則 (La loi naturelle) に関する新刊書二種

- I B. Raynaud, La loi naturelle en économie politique, 1936
- II Ch. Bourthoumieux, Essai sur le fondement philosophique des doctrines économiques, 1936

永田 清

こゝにいふ自然法則とは自然科學的法則といふ意味ではなくて、自然的秩序 (L'ordre naturel) の理念と等しい可成り形而上學的な法則の謂ひである。このやうな自然法則を信じて、この上に經濟學を建設したものにフイジオクラフトがある。然しフイジオクラフトだけが自然的秩序を説いたのではなくて、それには先蹤もあり、また後繼者もある。然しこれ等の學說史的考證は姑く措くとして、如何なる因由から經濟學上に自然法則の理念が導入せられ、而してまたそれは如何なる形で展開したのであらうか。惟ふに自然法則の理念は本來倫理的・宗教的的信念から發生したものである。至高・全智・仁愛の神を信することは、そのもとに制定せられたる自然法則に従ふことを命令する。この法則は不變不可侵にして最善なる宗教的法則である。この法則は如何にして會得されるか。吾々は理性の炬火 (Le flambeau de la raison) を浴びなければならぬといふのである。このやうな理論が、經濟學上における